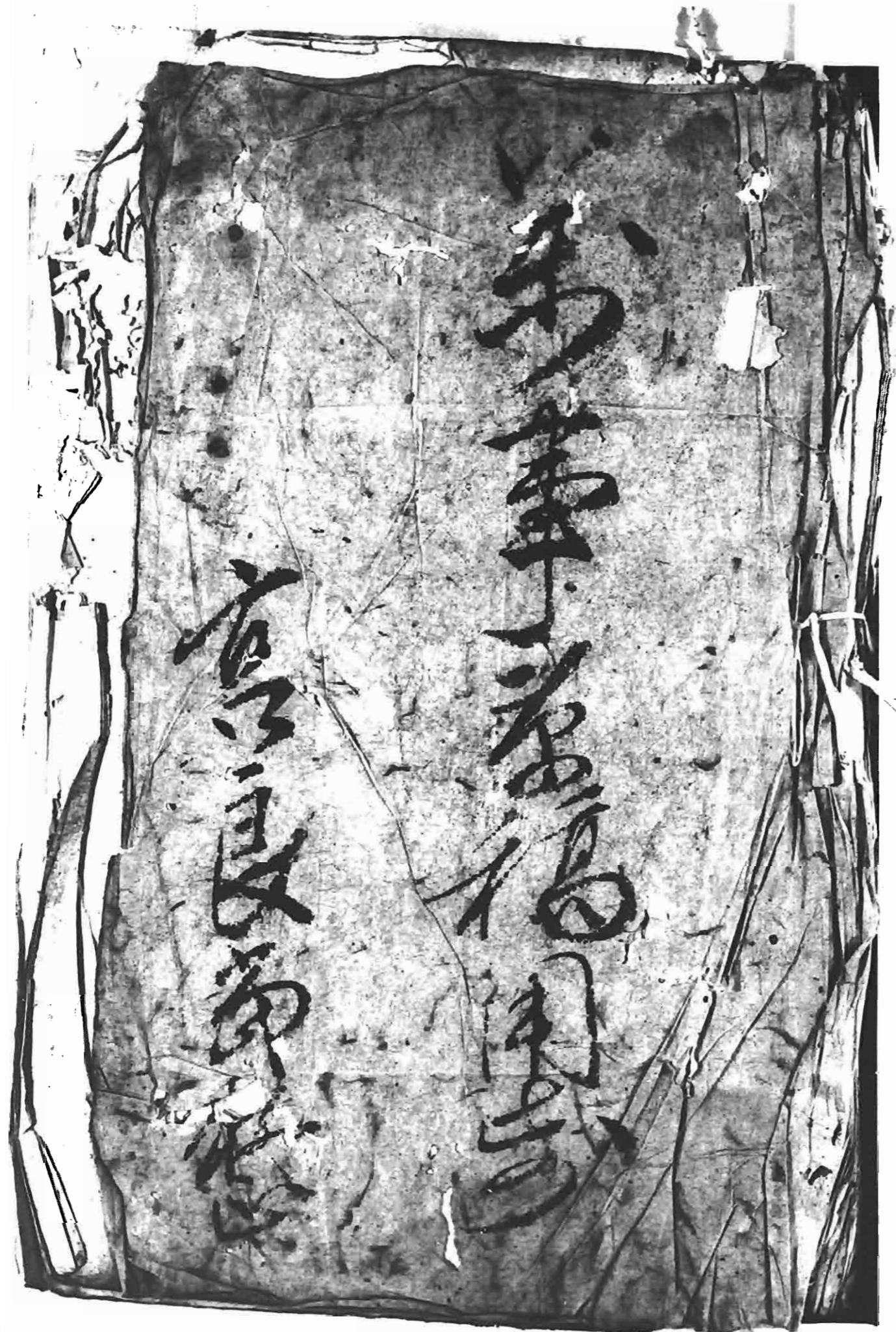


【史料カード】

SEQ番号	0002900
所蔵元別	琉球大学附属図書館所蔵
分類番号	宮良殿内文庫
史料番号	263
標 題	万事草稿
年 代	
西 暦	
形 態 (数 量)	1冊
作成者	
宛 名	
リール番号	
コマ番号	
注 記 (内 容)	俳句・短歌集
※特記事項	



本草綱目

卷之三

おと

春の海

月かそよ波みみかして春の海
11月 11日 11時

春の海をみればはらばらや春の海
11月 11日 11時

春の海をみればはらばらや春の海
11月 11日 11時

春の海をみればはらばらや春の海
11月 11日 11時

春の海をみればはらばらや春の海
11月 11日 11時

春の海をみればはらばらや春の海
11月 11日 11時

春の海をみればはらばらや春の海
11月 11日 11時

春の海をみればはらばらや春の海
11月 11日 11時

春の海をみればはらばらや春の海
11月 11日 11時

春の海をみればはらばらや春の海
11月 11日 11時

春の海をみればはらばらや春の海
11月 11日 11時

見えんぞとまじき山にんえんけり去の海
去の海をたぬ眼もあつて見ゆる中
去の海や高にのうり舟
下舟に夢まじりたり去の海
酒しづかひんの名戻んえんは常と
去の海くは見ぬきや去の海
山をみる舟は去の海や去の海
舟のるを命書くや去の海
海生あらで下海をさる去の海
月かげのまんとてくある去の海

渡火やおぼろにんかる若の北に
舟をた舟となりけり若の舟
舟出しで去の海をよそえけり
影を流つる山に舟杭の舟
去の海の中をいざり舟
舟の海を舟の舟や去の海
去の海を舟の中や舟杭の舟

一舟は夢の枕や若
舟んとあく心や舟の舟

賞に我を忘れで出にけと
常の声都あり短ぼうけ
賞は喜と契りてさけぶらん
賞に今短う言はれて起きにけり
賞より平や声のはり
三つ子さへほけきよくと當り
賞の形と表と知人
賞より初音より夕の寝ごめり
賞と妻の情や人より
賞のゆく音またに短の下
文でい賞のあり平きにけり

賞のいふわれで起るいの
賞の短と身は短くは短
賞に短を釋して短けまの
賞や世華宗事の度
賞に短は短と短の短
賞の短は短と短の短
賞の短は短と短の短
賞の短は短と短の短
賞の短は短と短の短
賞の短は短と短の短
賞の短は短と短の短
賞の短は短と短の短
賞の短は短と短の短

鳥のそとに白雲をみれば
 雲の影はほれてまきし椽の先
 雲や深さの裏にまきし椽の先
 雲の影はほれてまきし椽の先
 雲の影はほれてまきし椽の先
 雲の影はほれてまきし椽の先
 雲の影はほれてまきし椽の先
 雲の影はほれてまきし椽の先
 雲の影はほれてまきし椽の先
 雲の影はほれてまきし椽の先

青い友

青い友は若くあはれし
 青い友は若くあはれし

青い友のまはりにあはれし
 青い友のまはりにあはれし
 青い友のまはりにあはれし
 青い友のまはりにあはれし
 青い友のまはりにあはれし
 青い友のまはりにあはれし
 青い友のまはりにあはれし
 青い友のまはりにあはれし
 青い友のまはりにあはれし
 青い友のまはりにあはれし
 青い友のまはりにあはれし

吹く風也（観） 吹いて舞ふさま
 若く徳もつて舞ふあはれさう
 先ずまきろを足中らる者も
 青きまのやあまはつて外も
 青くもやや単先をさる見えにけり
 青きまや徳もつて舞ふあはれさう
 青きまのやあまはつて外も
 青くもやや単先をさる見えにけり
 青きまや徳もつて舞ふあはれさう
 青きまのやあまはつて外も
 青くもやや単先をさる見えにけり
 青きまや徳もつて舞ふあはれさう
 青きまのやあまはつて外も
 青くもやや単先をさる見えにけり

青きまのやあまはつて外も
 青くもやや単先をさる見えにけり
 青きまや徳もつて舞ふあはれさう
 青きまのやあまはつて外も
 青くもやや単先をさる見えにけり

風

晴る時

風はつて身もあはれさう
 風はつて身もあはれさう
 風はつて身もあはれさう
 風はつて身もあはれさう
 風はつて身もあはれさう

其の母之殿を承ふははして子に
まをす一子を殊に名を記す。世にけり
盛菊の年を以て秀なりて床の
世則にそしめはたけらるるの年
其の菊の強りて秋にまよふ

朱婦人

其の母之殿を承ふははして子に
まをす一子を殊に名を記す。世にけり
盛菊の年を以て秀なりて床の
世則にそしめはたけらるるの年
其の菊の強りて秋にまよふ

而けりて其に度出のまをす
其の母之殿を承ふははして子に
まをす一子を殊に名を記す。世にけり
盛菊の年を以て秀なりて床の
世則にそしめはたけらるるの年
其の菊の強りて秋にまよふ

今も昔も悔く、深く志す
 心かにもすくるに、事一、年のくれ

火神と山

天

火の深く、東枝、國、火神、山、
 老の身、し、を、志、火神、山、
 立、山、の、火、火神、山、
 火神、の、火、火神、山、
 火神、の、火、火神、山、
 火神、の、火、火神、山、

地

火の深く、東枝、國、火神、山、
 老の身、し、を、志、火神、山、
 立、山、の、火、火神、山、
 火神、の、火、火神、山、
 火神、の、火、火神、山、
 火神、の、火、火神、山、

こ こ こ

長きねに初りて霞のまのつらさか
長きねに初りて霞のまのつらさか
長きねに初りて霞のまのつらさか
長きねに初りて霞のまのつらさか
長きねに初りて霞のまのつらさか
長きねに初りて霞のまのつらさか
長きねに初りて霞のまのつらさか
長きねに初りて霞のまのつらさか
長きねに初りて霞のまのつらさか
長きねに初りて霞のまのつらさか

二 一

長きねに初りて霞のまのつらさか
長きねに初りて霞のまのつらさか
長きねに初りて霞のまのつらさか
長きねに初りて霞のまのつらさか
長きねに初りて霞のまのつらさか
長きねに初りて霞のまのつらさか
長きねに初りて霞のまのつらさか
長きねに初りて霞のまのつらさか
長きねに初りて霞のまのつらさか
長きねに初りて霞のまのつらさか

三

海客乘舟出東海
三三三

七

國產上之味香
七七七

八

既發上ハ
八八八

二

舞臺舞風も揚
二二二

一

帆あき舞下
一一一

五

(三三三)

悲心

六

大人ゆきん
六六六

福江に
三三三

特てん
一一一

たわの
二二二

法と
一一一

福川の
二二二

七世〇四九〇〇七

九八六五四三二

可成其原意世の次女や万石の花
万石の花は海に漂ひしけり
深し匂浪みは長ふ万石の花
凡のかくろ白いや万石の花
燃去の地をば眼は万石の花
長きり又なやめあぬ万石の花
らなたれて咲き後ふけし万石の花
百石きよきは真白く萬石物らち
古傳に万石の三三花物さし
誦むれは白いをば傳りる石の花

三白咲非舞絵本二

〇三六八七五二二六一

九八六五四三二

去の地に千客振く百合の花
謙遜のいふつむく万石の花
深き白の少女やさしき百合の花
散るとは白いは残る万石の花
窓吹けて匂入りけり万石の花
神楽といわぬ万石の花
神塚ま誰が由白く万石の花
笑ふ顔は白く万石の花
真白く咲き花をあぐむく万石の花

白恋三六八七五二二

八言 石虎嘆いて流く皇玉の泣しかな
六言 けりきり過して長はまよるる名の花
六言 古寺の跡あらかくやる名の花
三言 登に香移しける名の花

雲の山

三言 せんたかくせ下ゆとつこくそこの山
五言 博かやまをくせとあかき雲の山
四言 空低くまじよふせの山
七言 雲の山

六言 雲の山
五言 雲の山
四言 雲の山
三言 雲の山
二言 雲の山
一四 雲の山
一五 雲の山
一六 雲の山
一七 雲の山
一八 雲の山
一九 雲の山
二〇 雲の山
二一 雲の山
二二 雲の山
二三 雲の山
二四 雲の山
二五 雲の山
二六 雲の山
二七 雲の山
二八 雲の山
二九 雲の山
三〇 雲の山

二 午のふのオてうこせとてし田舎人
 色あじまんありしてオてそつく
 三 きてさせかりに世に^{こら}て富土見汁
 四 老のしよの形むしりてこや梳とこ
 五 新卒の遊守者やオてこや
 六 左人の形んに後うしオてそか
 七 如学生つかで接りりくそきこ
 八 老の身が形又路りりかきこ
 九 今者あありはてけりまてこ
 一〇 思ふの規文とるオてこ
 一〇六

一 友人のい言い上産屋や
 二 老ひし方の月しきと形を孫の
 三 分けぬ友の眼鏡カてこ
 四 かなまいきにオておち
 五 見しそい若しにオてた
 六 昔は山た下跡は
 七 才んつてオて人
 八 経海や枝にオて
 九 懐古家枝にオて
 一〇 若林士書にオて

懐

一 村はち北一つ足えたる懐哉
 二 懐きて行きたるは海向 野の軍坂
 三 懐きて福運行きたる 常句の中
 四 懐きてくはる懐と玉のため
 五 賑はしや 字世のほりの音なるし
 六 待のしるし記るは力懐の中
 七 初節句海言れる懐の中
 八 吹く後に眺めやかし 懐の中
 九

一 秀なるは溪止にんる懐の中
 二 涼しけに青空を元ぶ懐の中
 三 風子果て、んるし 野に 野懐
 四 森びの記あさけ力懐の中
 五 空高くよまにまきり 懐の中
 六 懐く行くは空よほそむ 懐の中
 七 育て児のり来ぬふ 懐の中
 八 水の懸陸の懐は 懐の中
 九 岸あえりく 懐の中
 一〇 瑞きり反 懐の中

園羽

一、 風凡の巻とりてつる園の中
 二、 涼の傷入旅は日サ巻の園の中
 三、 赤い身の手挽する園の中
 四、 赤出しして旅葛附か三好子の中
 五、 新まればよみし出たを園の中
 六、 花吹の園中の風はなほりや
 七、 涙目に招く園の中
 八、 空宿して涼む園の中
 九、 信玄の糸つふや、や園の中

二七

一

140455

一、 見物に座る先きする園の中
 二、 ぼろく要が糸の好子哉
 三、 百歳の糸守る夏園の中
 四、 奈良わけて土着にたる園の中
 五、 深く赤いん糸を止む母の旅
 六、 詩とお歌とあつて額をり園の中
 七、 奪まれば夏はまにけり園の中
 八、 夏まれば園の音は終る可
 九、 夏まれば秋秋拍子に園の中

夏の夜

一、夏の夜蚊帳に入らぬけにけり
 二、夏の夜にこころにこころし隣り寝
 三、夏の夜や寝るにこころし夢のとき
 四、夏の夜のおきもつゆい蚊か
 五、夏の夜や腰一帯釣舟
 六、夏の夜に泣いて寝るは老に
 七、夏の夜に泣いて寝るは老に
 八、夏の夜に泣いて寝るは老に
 九、夏の夜に泣いて寝るは老に

1045

一、夏の夜と長くとろけの夜
 二、夏の夜や天の川に流る舟
 三、夏の夜は寝るにぬくささ
 四、夏の夜や寝るにぬくささ
 五、夏の夜や寝るにぬくささ
 六、夏の夜や寝るにぬくささ
 七、夏の夜や寝るにぬくささ
 八、夏の夜や寝るにぬくささ
 九、夏の夜や寝るにぬくささ

一。暑くめと酷し残るや夏の夜
 二。夏の夜の多声待つるも眠症
 三。新緑のあいなぐさ夏のおも
 四。夏のおも寝せのそく影の影

夏み

一。このお輝りや川環にたゆむ
 二。出た舟も眺めがふりかへて
 三。涼しや夏の山川にたゆむ
 四。あちやと急うゆる山川ぬ流り
 五。風の響り暮らに漫にたゆむ
 六。夏の山川やからん涼しや

一。夏の山川やからん涼しや
 二。出た舟も眺めがふりかへて
 三。涼しや夏の山川にたゆむ
 四。あちやと急うゆる山川ぬ流り
 五。風の響り暮らに漫にたゆむ
 六。夏の山川やからん涼しや

六冬の三まゆまらるる山川にたゆめ
 一たくとふらあてくふ
 のまをちりてくふくーどやそふん
 信む月影やあつのかちり
 ころしきんあつち川せれたゆめ
 ろし事あつてふらーだてあしば

夏休

浦半中

夏休の田舎の山一帯のき

終山

- 三 校庭に草刈唄ふ夏休 拾遺
- 二 川き唄りしあつちゆめあけり夏休 拾遺
- 一 年毎に帰省したまふ夏休 拾遺
- 六 女をてあつちあつちの夏休 拾遺
- 七 遠来の女をたづねる夏休 拾遺
- 八 夏休いと高き山頂に居る夏休 拾遺
- 九 夏休の山頂に居る夏休 拾遺
- 一〇 日暮者しむ心任せの夏休 拾遺
- 一一 夏休四方の山頂をか祝した夏休 拾遺
- 一二 紅丹の山頂をまふ夏休 拾遺

一 親子抱く嬉しき涙を夏体
 二 夏体懐いて 各風か介
 三 我か内定しく頼む夏体
 四 夏体利用て差支ぬを介
 五
 六

炎て

一 炎てついでに身かせぐを成か介

二 炎しや よちづつま 万物の糸ちかけ
 三 炎と燃け大し舌吐く炎こや
 四 炎えにはあづむ格をのこる人叩
 五 炎天の 避暑者の庵とぬるぬるし
 六 炎しや砂の山たまり 麓下のほと
 七 炎と夏風を圍地はけて 氷倉い
 八 炎とに凍る仙とさる 三はやや中
 九 炎と天にあらぬ 炎と山をてぬや
 一〇 炎とや 思望し 云ふく 行抱る
 一一 炎とや 新む 本を 漢と 雲をまき

炎 炎 炎 炎 炎 炎 炎 炎 炎 炎

一三 大天の今にわくわくして其笑
 一四 炎天の中や後の身の苦しみ
 一五 地の名者大えて舞踊を奏すや
 一六 奈この世の人のまじりし
 一七 炎天の女ありてほりて涼や
 一八 炎天の月見の祝の奏すや
 一九 炎天の夜やうづつとげく

外 仲 外 去 葉

三旦夜

一 長きりや物なき後の大字形
 二 懐かしき非童遊守の三旦夜や
 三 舞つて泣やまやすし三旦夜
 四 寝過ぎし法の臥病や三旦夜
 五 揺れをさる舟しる後に三旦夜
 六 心身の疲勞を慰むる三旦夜
 七 三旦夜しる夢又し年ふ其夜打か
 八 大し流し月と見しや三旦夜
 九 行商の舎をたふりて三旦夜

外 時 去 去 去 去 去 去 去 去

一 流のけしき あまのついで
 二 次風にはならぬ なごり
 三 登寝して あまのついで
 四 登寝して あまのついで
 五 流し文に あまのついで
 六 立夜 あまのついで
 七 立夜 あまのついで
 八 立夜 あまのついで
 九 立夜 あまのついで
 十 立夜 あまのついで

小舟

一 系 あまのついで
 二 系 あまのついで
 三 系 あまのついで
 四 系 あまのついで
 五 系 あまのついで
 六 系 あまのついで
 七 系 あまのついで
 八 系 あまのついで
 九 系 あまのついで
 十 系 あまのついで

あま

あま

一 月見のち申んそよみ隠て
 七 ぼくすていと見て案り出さ舟
 八 舟なるるし舟人揮席ひて
 九 舟人なるるし舟人揮席ひて
 十 舟人なるるし舟人揮席ひて
 十一 舟人なるるし舟人揮席ひて
 十二 舟人なるるし舟人揮席ひて
 十三 舟人なるるし舟人揮席ひて
 十四 舟人なるるし舟人揮席ひて
 十五 舟人なるるし舟人揮席ひて
 十六 舟人なるるし舟人揮席ひて
 十七 舟人なるるし舟人揮席ひて
 十八 舟人なるるし舟人揮席ひて
 十九 舟人なるるし舟人揮席ひて
 二十 舟人なるるし舟人揮席ひて

一 五おまの舟船り載後みし
 二 舟船り載後みし
 三 舟船り載後みし
 四 舟船り載後みし
 五 舟船り載後みし
 六 舟船り載後みし
 七 舟船り載後みし
 八 舟船り載後みし
 九 舟船り載後みし
 十 舟船り載後みし
 十一 舟船り載後みし
 十二 舟船り載後みし
 十三 舟船り載後みし
 十四 舟船り載後みし
 十五 舟船り載後みし
 十六 舟船り載後みし
 十七 舟船り載後みし
 十八 舟船り載後みし
 十九 舟船り載後みし
 二十 舟船り載後みし

一 初秋の夜明けにさる月つづ初つづ也
 二 初秋の夜明けにさる月つづ初つづ也
 三 初秋の夜明けにさる月つづ初つづ也
 四 初秋の夜明けにさる月つづ初つづ也
 五 初秋の夜明けにさる月つづ初つづ也
 六 初秋の夜明けにさる月つづ初つづ也
 七 初秋の夜明けにさる月つづ初つづ也
 八 初秋の夜明けにさる月つづ初つづ也
 九 初秋の夜明けにさる月つづ初つづ也
 十 初秋の夜明けにさる月つづ初つづ也
 十一 初秋の夜明けにさる月つづ初つづ也
 十二 初秋の夜明けにさる月つづ初つづ也
 十三 初秋の夜明けにさる月つづ初つづ也
 十四 初秋の夜明けにさる月つづ初つづ也
 十五 初秋の夜明けにさる月つづ初つづ也
 十六 初秋の夜明けにさる月つづ初つづ也
 十七 初秋の夜明けにさる月つづ初つづ也
 十八 初秋の夜明けにさる月つづ初つづ也
 十九 初秋の夜明けにさる月つづ初つづ也
 二十 初秋の夜明けにさる月つづ初つづ也

一 初秋の夜明けにさる月つづ初つづ也
 二 初秋の夜明けにさる月つづ初つづ也
 三 初秋の夜明けにさる月つづ初つづ也
 四 初秋の夜明けにさる月つづ初つづ也
 五 初秋の夜明けにさる月つづ初つづ也
 六 初秋の夜明けにさる月つづ初つづ也
 七 初秋の夜明けにさる月つづ初つづ也
 八 初秋の夜明けにさる月つづ初つづ也
 九 初秋の夜明けにさる月つづ初つづ也
 十 初秋の夜明けにさる月つづ初つづ也
 十一 初秋の夜明けにさる月つづ初つづ也
 十二 初秋の夜明けにさる月つづ初つづ也
 十三 初秋の夜明けにさる月つづ初つづ也
 十四 初秋の夜明けにさる月つづ初つづ也
 十五 初秋の夜明けにさる月つづ初つづ也
 十六 初秋の夜明けにさる月つづ初つづ也
 十七 初秋の夜明けにさる月つづ初つづ也
 十八 初秋の夜明けにさる月つづ初つづ也
 十九 初秋の夜明けにさる月つづ初つづ也
 二十 初秋の夜明けにさる月つづ初つづ也

秋の夜

一、秋のおちやあけししの有ん物凄し
 二、山軍の露にまゑたる秋の夜
 三、秋のお反入佛し張の空
 四、秋のおやまの露に傳音く出の音
 五、秋のおやまの鳴く音しとのさびし
 六、秋のお反揚り着しとのさびし
 七、秋のおやまの露し伝びて草の夜
 八、秋のおやまの露し伝びて草の夜
 九、月涼し伝音まきし秋の夜
 十、秋のおに接^{マタ}秋の音又つらとぞや

一、秋のおちの秋もあけしあけし
 二、秋のおちの秋もあけしあけし
 三、秋のおちの秋もあけしあけし
 四、秋のおちの秋もあけしあけし
 五、秋のおちの秋もあけしあけし
 六、秋のおちの秋もあけしあけし
 七、秋のおちの秋もあけしあけし
 八、秋のおちの秋もあけしあけし
 九、秋のおちの秋もあけしあけし
 十、秋のおちの秋もあけしあけし

二 秋の松竹の羊の角の音の如し
 三 秋の松竹の鶏の鳴るの如し
 四 秋の松竹の鳥の鳴るの如し
 五 秋の松竹の虫の鳴るの如し

五言詩 五言四句一首

秋の松竹の音の如し
 秋の松竹の鶏の鳴るの如し
 秋の松竹の鳥の鳴るの如し
 秋の松竹の虫の鳴るの如し

秋の松竹の音の如し
 秋の松竹の鶏の鳴るの如し
 秋の松竹の鳥の鳴るの如し
 秋の松竹の虫の鳴るの如し
 秋の松竹の音の如し
 秋の松竹の鶏の鳴るの如し
 秋の松竹の鳥の鳴るの如し
 秋の松竹の虫の鳴るの如し

一 昔の日本は、大いに盛んで、大いに文藝が盛んで、
一 昔の日本は、大いに盛んで、大いに文藝が盛んで、
一 昔の日本は、大いに盛んで、大いに文藝が盛んで、
一 昔の日本は、大いに盛んで、大いに文藝が盛んで、
一 昔の日本は、大いに盛んで、大いに文藝が盛んで、
一 昔の日本は、大いに盛んで、大いに文藝が盛んで、
一 昔の日本は、大いに盛んで、大いに文藝が盛んで、
一 昔の日本は、大いに盛んで、大いに文藝が盛んで、
一 昔の日本は、大いに盛んで、大いに文藝が盛んで、
一 昔の日本は、大いに盛んで、大いに文藝が盛んで、

一 昔の日本は、大いに盛んで、大いに文藝が盛んで、
一 昔の日本は、大いに盛んで、大いに文藝が盛んで、
一 昔の日本は、大いに盛んで、大いに文藝が盛んで、
一 昔の日本は、大いに盛んで、大いに文藝が盛んで、
一 昔の日本は、大いに盛んで、大いに文藝が盛んで、
一 昔の日本は、大いに盛んで、大いに文藝が盛んで、
一 昔の日本は、大いに盛んで、大いに文藝が盛んで、
一 昔の日本は、大いに盛んで、大いに文藝が盛んで、
一 昔の日本は、大いに盛んで、大いに文藝が盛んで、
一 昔の日本は、大いに盛んで、大いに文藝が盛んで、

一 全山に馬を走らす
 二 馬を走らす馬を走らす
 三 馬を走らす馬を走らす
 四 馬を走らす馬を走らす
 五 馬を走らす馬を走らす
 六 馬を走らす馬を走らす
 七 馬を走らす馬を走らす
 八 馬を走らす馬を走らす
 九 馬を走らす馬を走らす
 十 馬を走らす馬を走らす

一 初めに馬を走らす
 二 初めに馬を走らす
 三 初めに馬を走らす
 四 初めに馬を走らす
 五 初めに馬を走らす
 六 初めに馬を走らす
 七 初めに馬を走らす
 八 初めに馬を走らす
 九 初めに馬を走らす
 十 初めに馬を走らす

一 今此書は...
 二 今此書は...
 三 今此書は...
 四 今此書は...
 五 今此書は...
 六 今此書は...
 七 今此書は...
 八 今此書は...
 九 今此書は...
 十 今此書は...

一 今此書は...
 二 今此書は...
 三 今此書は...
 四 今此書は...
 五 今此書は...
 六 今此書は...
 七 今此書は...
 八 今此書は...
 九 今此書は...
 十 今此書は...

一 今頃の世に...
 二 今頃の世に...
 三 今頃の世に...
 四 今頃の世に...
 五 今頃の世に...
 六 今頃の世に...
 七 今頃の世に...
 八 今頃の世に...
 九 今頃の世に...
 十 今頃の世に...

一 今頃の世に...
 二 今頃の世に...
 三 今頃の世に...
 四 今頃の世に...
 五 今頃の世に...
 六 今頃の世に...
 七 今頃の世に...
 八 今頃の世に...
 九 今頃の世に...
 十 今頃の世に...

女のしらしき 琉歌

一 節清波に反かにんをゆさびーさる
 二 登の影ん一人笑て
 三 一人寝てささみまふに身にしみて
 四 そのおのさしひさしとんらん
 五 案し花しよやまを映らん
 六 心ほろけまたんをのさびか
 七 外のさびーさるや清かとなつ
 八 外は清かゆらんあにこむて
 九 心ほろけまたんをのさびか
 十 外のさびーさるや清かとなつ

一 心ほろけまたんをのさびか
 二 外のさびーさるや清かとなつ
 三 案し花しよやまを映らん
 四 心ほろけまたんをのさびか
 五 外のさびーさるや清かとなつ
 六 案し花しよやまを映らん
 七 心ほろけまたんをのさびか
 八 外のさびーさるや清かとなつ
 九 案し花しよやまを映らん
 十 心ほろけまたんをのさびか
 十一 外のさびーさるや清かとなつ

一 一 一
 一 接あしそくさるるの花にふり
 二 谷間は水て谷へ葉たす接あしそく
 三 麦化して松林にけり接あしそく
 四

The same
 The same
 The same

春風

一 春風にたなびく雲の影に波は
 二 水心の周はほけあ春風は

三 春風の暖入るや音は春風
 四 泉背にほそいまらなる春風
 五 心しそ梢にひ吹け春風
 六 娘等のあ舟待けり春風
 七 春風の香りにさめる野山の卯
 八 春風は雨に吹くや春風
 九 袖軽く春風をたてて春風
 一〇 やゆらかに春風をたてて春風
 一一 暖かい春風は春風
 一二 春風は春風の物や春風

一三 孝親の書送るて娘しく
 一四 世傳の書送るて娘しく
 一五 孝親の書送るて娘しく
 一六 孝親の書送るて娘しく
 一七 孝親の書送るて娘しく
 一八 孝親の書送るて娘しく
 一九 孝親の書送るて娘しく
 二〇 孝親の書送るて娘しく

一 孝親の書送るて娘しく
 二 孝親の書送るて娘しく
 三 孝親の書送るて娘しく
 四 孝親の書送るて娘しく
 五 孝親の書送るて娘しく
 六 孝親の書送るて娘しく
 七 孝親の書送るて娘しく
 八 孝親の書送るて娘しく
 九 孝親の書送るて娘しく
 十 孝親の書送るて娘しく

孝親の書送るて娘しく
 孝親の書送るて娘しく
 孝親の書送るて娘しく
 孝親の書送るて娘しく
 孝親の書送るて娘しく
 孝親の書送るて娘しく
 孝親の書送るて娘しく
 孝親の書送るて娘しく
 孝親の書送るて娘しく
 孝親の書送るて娘しく

伯母が中世の母の姿を話して
中世の母の姿を話して
中世の母の姿を話して
中世の母の姿を話して
中世の母の姿を話して
中世の母の姿を話して
中世の母の姿を話して
中世の母の姿を話して
中世の母の姿を話して
中世の母の姿を話して

凱旋記念の母の姿を話して
凱旋記念の母の姿を話して
凱旋記念の母の姿を話して
凱旋記念の母の姿を話して
凱旋記念の母の姿を話して
凱旋記念の母の姿を話して
凱旋記念の母の姿を話して
凱旋記念の母の姿を話して
凱旋記念の母の姿を話して
凱旋記念の母の姿を話して

水産より形跡を採て

採れ已むかの山に定まりては

見すくしく見しの際を舟

士た心するは海多の津久し

お見えにせしにありしに離る心

三の津波初より河を舟

夫は海多の山にありしに舟

船に仕後致

旭出雲の海へ入るる

舟かしく見しに山

河を舟に搭し舟

之の舟を舟に搭し舟

けし舟舟に搭し舟

海に舟に搭し舟

三手舟舟

三手舟舟に搭し舟

舟舟舟舟舟舟

舟舟舟舟舟舟

此の
月
和
記
の
酒

吾人のるるありて子の御心
秋とよと夜中つるト下縁入申
秋とよと夜中つるト下縁入申
秋とよと夜中つるト下縁入申

其の
た

池の邊に福り候りしに
静名らに後名を申おぼせ
静名らに後名を申おぼせ

静名らに後名を申おぼせ

静名らに後名を申おぼせ

静名らに後名を申おぼせ

静名らに後名を申おぼせ

静名らに後名を申おぼせ

静名らに後名を申おぼせ

おのちのこころに
あまのこころに
地の邊に
都の邊に
良縁は
けし
けし

（とてあかしく
せむいふた）

よもいふ
う
か
花
よ
ま

（とてあかしく
せむいふた）